

太陽系の環境を守る惑星科学を

国立大学にも地球物理学科を改組した地球惑星科学科が創設されて、惑星科学もはやりの学問の一つになったようである。しかし新しい学科でも、固体、地震、超高層、海洋、火山といった講座別は本質的には変わらず、いくつかの独立な分野を柱として成り立っているように思われる。

東京大学地震研究所の初期の歴史を調べた事がある。地震研究所は関東大震災の後、物理学、地震学、火山学、地質学、建築学などの研究者が集まって、文字どおり学際的に地震の発生機構、その災害の防止などについて研究するため組織として生まれ、創立当時はそれがうまく関連を持って機能し、多くの優れた成果を上げた事は、よく知られている。地震研究所の定例の談話会には、物理学の長老の長岡半太郎先生や寺田寅彦先生を初め、まだお若かった坪井誠太郎、坪井忠二、永田武先生などが出席されて、とても活発な議論が行われたと聞いている。ところが、それから何年か経って、東大に地球物理学科が出来る頃になると、それぞれ偉くなられた先生方が講座別に立派な城を作られ、その間の交流が少なくなったと思われる。地球惑星科学科がこのような伝統と風習を残しつつ発足したのではないかというのが、少し心配である。

大学はともかくとしても、惑星科学会が誕生したのであるから、その論文発表会などで分野間の壁があったのではその存在理由が少なくなる。お互いに専門が違う人達が集まって、惑星科学の発展を目標とするのであるが、考え方も用語も分野間で全くといってよい程違うことがあると、考えられる。筆者は京都大学の林忠四郎先生の主催する、「太陽系の起源、隕石の起源」の研究会に何年間か出席していた事があるが、正直言って隕石の化学分析の話は少なくとも当初は全く理解出来なかった。隕石の研究者からみれば、筆者の話も理解し難かったであろう。幸いにして、林先生や中澤清さんのような両方の橋渡しの出来る方がおられたので、その研究会は成り立つ事が出来た。惑星科学会は、惑星と太陽系についての多面的な理解を促進するための会で、その意義は社会的にもとても大きく、その存在は科学者からも大いに期待されている。

太陽系の探査に付いても、世間の人達の関心は高い。先日の朝日新聞の天声人語にも、小惑星を探査機で地球に持ってくる話が出ており、将来の人類の資源の確保のためにも有用と持ち上げていた。筆者に言わせて貰えば、世界の宇宙（スペース）科学者の考えている、スペースコロニーの話も、太陽系の天体での資源探査の話でも、今世紀初めまで地球上で懲りずにさんざんやってきた、先進国による植民地の拡張や、土地の再開発による地球汚染の経験についての、反省無しで考えられていると思う。この種のことで昔地球上でやってきた事を顧みれば、惑星や太陽系についての完全な理解なしに、開発計画などを考えるべきではないと信じている。

大きさに言えば、小惑星一つを引っ張って来ただけでは、他の小惑星の地球にぶつかる確率が高くなることはないという保証はない。深い思慮なしに、自然に逆らって、太陽系の天体の配列は変えてはならない。このようなことも、惑星科学会が真剣に議論し、太陽系のとても素晴らしい姿を保全するように心がけてもらいたい。惑星科学会は太陽系の理解のための、そして、太陽系の環境を守るための学会であって欲しい。

国立天文台・古 在 由 秀